

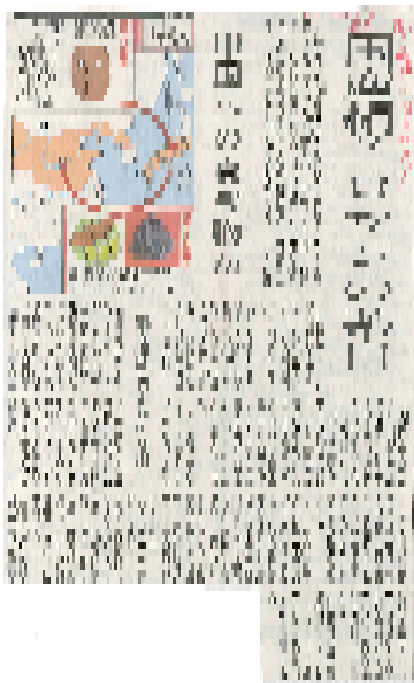
“考古ファンのじゃれごと”⑨

私の仮説を専門家が立証

『国産絹？ロマンの糸口』

(1) 纏向遺跡(3世紀後半)で出土分析結果

表題の件は考古ファンのじゃれごとシリーズで発表していて、そのNO⑤を2012.1.21に起稿し2月29日発行の“きび考”5号に掲載し発表した。タイトルは「古代社会の産業革命と異文化の融和」と題し、主に水耕稲作技術とそれを受け入れた先住民（縄文人）の関係を論じている。



2013.25.5.31 朝日掲載記事

私はその中で、魏志倭人伝の絹は「山繭」と仮説を立てています。当時は学術的に国産の繭が定着していない状況で、倭人伝に記載されている『絳青縑（こうせいけん）＝赤と青の絹』の定説がなかったのですが私は次のように表現しています。

『魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸(養蚕)は5世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。中国地方の山塊を散策していますと、今でも山繭を見かけます。金糸は貴重でした卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆の木が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が1000年も早く縄文中期の遺物が出ています。

繊維質の多い麻や三桎(みつまた)・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿(ゆう)と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿(もめん)ではありません。着物は当時機織が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ踵でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅(3~40cm)と決まっています。女性は貫頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。』



今回上記朝日新聞の紹介で奈良女子大の中沢隆教授が、纏向遺跡から1991年に出土した遺物の分析で「天蚕＝てんさん」であることを証明され。それを染色して「絳＝赤いろ」が出せる技術もベニバナの花粉の確認で証明された。

この記事に接して素人の考古ファンが立てた仮説が、こんなに早く学者によって証明されたことが嬉しく、考古ファン冥利につきた思いであった。

(2)中国地方山地での山繭採取

私は戦後、母方の親戚が製糸工場を営み繭から絹糸を作っていた。湯気が噓(む)せ返る工場の中で、年配の大勢のおばさん達が指サックをして絹糸を撚り出している光景の中で育った。一種いやな蛹(さなぎ)の匂いが鼻を衝(つ)いた。

中国地方の山麓では山繭(カイコの繭と同じ形で色が薄茶)がクヌギの枝にぶら下がっているのが目に付いた。それを集めて、叔父さんのところへ、持っていけば、子供の小遣いには余るほどであった。大人も専門に集めているようであって、製糸すれば茶色であり金色に輝いた。一般のカイコの白い繭より高価なものようであった。私の幼少の頃の体験から古代に興味を持つようになって卑弥呼の魏への土産と重ねた。

(3)倭人伝の魏への贈り物は天蚕と漆

桑の木の葉からカイコ(家蚕=かさん)は古代中国とギリシャを結ぶシルクロードで有名ですが、完全に家畜化された白い繭で今日まで綿々(めんめん)と繋がっています。

私の認識ではカイコや桑は半島から秦氏の技術集団が日本列島に持ち込んだと考えますが、繭を製糸にする技術が先行し桑と家蚕は後のことと思います。繭は山繭=天蚕でした。古代人も衣食住は、身近な山野の自然から採取し活用しました。麻や葛(くず)の自生している植物からの織物と、山繭や小動物の皮を加工する技術は持っていました。

特に漆の技術は日本の方が大陸より古いとの説が定着しています。日本の先住民=縄文人とその後の弥生人は海峡を挟んで大陸や半島との交流が活発で、金属加工(主に鉄や青銅器)稲作と関連技術を共有していました。海人族=倭族の活躍です。

卑弥呼はその中から、当時も今もそうですが貴重な天蚕の黄金の絹と中国地方特産の今の備中漆を持参し魏の皇帝に贈りました。魏志倭人伝では絳青縑(こうせいけん)として当時の中国の言葉で伝えているのです。

(4)養蚕の思い出

私は戦後に山陰に育ったので、まだ養蚕が農家の一番の副業でした。母屋に続いて「養蚕場」があり、牛や馬は母屋の内庭で飼っていて家族同様に可愛がっていました。まさに家族の一員でした。蚕も家畜として飼われた最初で最後の昆虫です。小さい卵から孵った1齢から10時間程度の眠りを重ね5齢で蛹(さなぎ)繭を作りその中で蛹化(ようか)し完成する。



自然のおはなし カイコ 山陽 25.7.24

小さい時の蚕は柔らかい桑の葉を与えていて、成長につれて食欲も多くなり竹の養蚕棚いっぱいの桑の葉に音を立てながら食べていた。温度管理も大変らしく、室内は密閉され大人の真剣な様子が子供たちにも伝わってきた。食欲も旺盛になると、糞も多くその独特な臭いも忘れられない。

桑の葉もお仕舞いの頃には枝ごと採取してきて指先につけた刃物で素早く枝から葉を収穫していた。枝の片付け等が子供の役で外庭に山積みしておき、五右衛門釜のお湯の焚き火材として重宝していた。

その葉を採った残りの枝＝桑にとっては徒長枝は、確か皮を剥いで、和紙の材料に使ったと思うが子供で詳しくは覚えていない。桑と同種の一年草が麻で、麻の木の皮から麻布を紡いだ。

我々が中学生になる頃は、あれだけ大切にしていた養蚕用の竹棚も、風呂の炊き材に消えていった。若者は「金の卵」として都会に駆り出された。

桑の木には実が付き、赤実が熟すると黒くなり、子供の格好のオヤツであった。学校の帰り道、他家の桑畑で採取して食べると口元が黒くなっていて、一見して悪さがばれたが誰も咎める大人はいなかった。昭和 30 年代初めまでの集落の様子で、懐かしい。

実は桑の実は、今住んでいる岡山市中区のふれあいセンターの中庭に植えてある。当地が桑野の地名に由来して、気の利いた職員が植栽したのだろう。グランドゴルフの仲間と遊戯中に、自然と手が出て桑の実を食していると、私より年配の仲間が珍しそうに見ている。干拓地で育った彼らには養蚕の経験が無く、桑畑は存在しない、よって桑の実も知らないで育ったのだ。

懐かしいことは他にもある。蛹（さなぎ）は私たちの当時は一般に鶏や鯉の餌だったが戦時中は人間の食材だったと親から聞いた。稲穂が実る頃は蝗（イナゴ）が大量にいて、自宅に持ち帰って煎って食べた。今でもイナゴの佃煮が美食家に愛されているが、当時は子供のオヤツであった。

余談だが地球の人口が増えると究極の食材の一つに昆虫があるとの学説を耳にした。蛹（さなぎ）が絹の材料でなく、食材の時代になるかもしれない。

(5)まとめ

今では皇居で田植えと養蚕が皇室の伝統行事として伝えられ、一般の養蚕はGM（遺伝子組み換え）カイコに替わりつつあることが、朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事に掲載されていた。



朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事

西暦 243 年に邪馬台国の卑弥呼が魏王に贈った絳青縑（こうせいけん）と称する絹が天蚕（山繭）であったとする私の仮説が今年の 5 月 31 日に学者によって証明された、意義は私にとって大きな出来事であった。話は横道にそれたが、それも一興として懐かしく思い出した。

2013. 25. 8. 2